これまでも、
これからも、
横浜らしく

横浜市公共建築の100年

100TH

市民文化会館 関内ホール

32

2022（令和4）年8月24日掲載

1986年に開館した『横浜市市民文化会館関内ホール』は、芸術文化の発信と交流の場として、長く市民に親しまれてきた。築後30年が経過したことを機に大規模改修工事を実施。モダニズム建築の名作を多く世に送り出した建築家、芦原義信の設計による建築の質やオリジナリティーを保持しながら、さまざまなジャンルのエンターテインメントをより快適に楽しめる空間として、2018年9月にリニューアルオープンしている。改修設計を担当した建築家で芦原太郎建築事務所所長の芦原太郎氏に、設計のポイントとともに、モダニズム建築の活用の在り方などを聞いた。

建築家 芦原太郎氏（芦原太郎建築事務所所長）に聞く

街に果たす役割受け継ぎ最適化

横浜の中心市街地として発展してきた関内・馬車道エリア。この開港以来の歴史が息づく街並みに大きく開かれたファサードは、関内ホールの持つ魅力の一つだ。

「街に対する顔をどうつくっていくか、一生懸命考えていたのだと思う。外部空間や街並みについての研究が実作品に実践されている。音響や雰囲気を含めホールもオーソドックスにきちんとできている。公共ホールの優等生だなと感じる」と、その印象を率直に語りつつ、改修に当たっては「いまの時代に、いまの人びと、街にとって最良な答えを出す」という思いを込めた。

芦原氏

なにより「モダニズムの建築家として機能、ファンクションを重視していたわけだから、僕らも極めてオーソドックスに機能面から次の30年に向けた関内ホールを考えた」とふり返る。

開館以来、初めての長期休館を伴った大規模改修工事では、災害拠点施設としての機能を担保するため、大小ホールとエントランスの特定天井耐震化改修を中心に、施設全体の長寿命化対策として設備インフラを全面更新。さらに天井改修に合わせて大ホールの音響計画や舞台機構も更新するとともに、ホール客席を含め内外装をリデザインした。

特に音響は「ホールにとって一番大事なこと」であり、「関内ホールはもともと音響の評判も良かったが、どうせ天井を変えるのなら地震対策だけでなく、より良い音になる天井にしよう」と永田音響設計と協働して最適解を求めた。

ホール客席も「座席幅を広げ、椅子自体もグレードアップした。中央ブロックは千鳥配置に変更し、より気持ちよく見えるようにしている」など、安全で快適に鑑賞できる環境を整えた。客席の色は「馬車道の赤レンガをイメージしたエンジ色に近い赤」に大胆に変更し、「ハレの場」としての高揚感も演出している。

ファサードの雁行するミラーガラスの壁面は、街路樹からの木漏れ日をイメージさせる白のアルミのデザインパネルを西側に1面ずつ取り付けることで日射を遮へいしながら変化のある表情を見せている。エントランスの床仕上げも既存のレンガタイルから白を基調とした石張りに更新することで明るく来場者を迎え入れる空間とした。

一貫するのは「意匠的な部分や空間の持つ質、オリジナルなものは尊重し、きちんと活かしながら、性能はより良いものにしていく」姿勢であり、「父の意識にあったのは、横浜の市民の、街の、都市のために役に立つ建築を一生懸命つくっていくという思いではないのか。その役割をいまの時代にできるだけうまく果たしていくために改修していく」という、受け継がれる思いだ。

上：外観／下：大ホール

他方、「父の時代は手描き図面。これをすべてCADデータで書き起こすという、設計の前段での図面のCAD化には苦労した」と苦笑いしつつ、「そのCADデータをベースに、ファシリティマネジメントを展開していけば、いずれまた来る設備更新への対応をはじめ、維持管理の効率、能率を上げることにつながるのではないか」と提起する。

時を重ね使いこなす知恵を

パリの街がそうであるように、「都市の魅力を形成するには100年以上、200年、あるいは300年というスケールで時間を積み重ねていくことが大事になる」とした上で、「いまの時代の〝いいね〟を建築の形にして次の時代に引き渡す。受け継いだ方はその時代、時代で工夫していく。要は長い時間をどうやって継続させるか。ダイナミックな発想の転換をしながら、建築やインフラをうまく使いこなすか、その使い方の知恵を社会なり街が持つ必要がある」と強調する。

横浜市公共建築の100年

――これまでも、これからも、横浜らしく――

2023年7月

発行　横浜市建築局

編集企画・原稿　[公共建築100周年事業記念誌班]
永山 智文
池田 貴光
石川 久美子
髙松　誠
藤代 涼介
安藤 皓央
市川 洸靖
土屋 隆文
能上 真衣
三宅 俊平

編集企画・監理　[AND150株式会社]
野田 恒雄

デザイン・装丁　[STGK Inc.]
伊藤 祐基